

卷頭言

「友からのバトン」

宇田川 芳江

東京で桜の開花宣言が行われた日に、親友が天に召された。今年1月半ばに急に余命1カ月の宣告を受け、身辺整理もできないまま大学病院に入院していた。ホスピスに移りたいと言っていたが、諸事情でそれは叶わなかった。私は夕方になると毎日のように病院に通い、歯磨きを手伝ったり、一緒にいる時間を持つようにしていた。ビールが好きだった人なので、内緒でビールを一口でもスプーンで飲ませようかと思ったこともあったが、とうとうそれはできなかった。彼女は北区の手話通訳者で、きつつき会という手話サークルの代表も長く務めていた。東京にいくつかあった中途失聴・難聴者の団体やろう者の団体、東京手まねを学ぶ会、きつつき会などが集まって、1969年に東京都聴力障害者団体連絡協議会（連協）を結成し、東京都に対し福祉施策の要望を繰り広げていたとき、彼女はきつつき会の一員として活動していた。当時は手話通訳者や要約筆記者の派遣制度はまだなくて、連協の都民生局交渉のときは、手話サークルの人たちが要約筆記者も兼任していた。私は、東京都中途失聴・難聴者手話講習会を修了した後、みみより会に入会し、後に中難協理事長になった田中 順氏に勧められて、都民生局交渉に参加していた。そこできつつき会の人たちと知り合い、その友情は今も続いている。

病状がどんどん重くなり、口や手が満足に動かせなくなると、お互いの意思の疎通が難しくなった。彼女のわずかに動く唇や表情から言いたいことを読み取るしかない。なかなかうまく読み取れないと、彼女の眉間にわずかにしわが寄る。彼女のもどかしい思いが感じられて、読み取ってあげられないのが申し訳なく悲しかった。

20年ほど前、難聴の友人が末期がんで大学病院に入院していたことがあった。黄疸が出て目も開けられず、聞こえずに話しかけても反応しないため、看護師はまるで丸太を動かすように突然体位を変えていた。その友人は伝音難聴だったのを思い出し、らくらくホンという筒を買ってきて、看護師に、これを使って耳にあてて言葉を掛け、反応があつてから体位を変えてほしいとお願いしたが、あまり使ってもらえないうちに旅立ってしまった。

聞こえない自分が、彼女のようになったとき、どのような医療を選択するのか、どのようにコミュニケーションを取ったらしいのか、最期まで自分らしく生きるために考えておくことを今回は痛感させられた。人工内耳の扱いや充電の仕方などを、自分ができないときのため、他の人にわかるようにしておかないといけない。献体は申し込んであるが、エンディングノートも書いておかないと…。聞こえない人の支援一筋に生きた彼女に恥ずかしくないように、私も与えられた役割をしっかり果たしていきたいと誓った。

久しぶりの巻頭言なのに重い話になつたが、聞こえにくい私たちが自分らしい最期を全うするために、思いを込めて。